



「京都の紅葉はクリスマス頃」 NHKが「2050年の天気予報」

財団法人 地球・人間環境フォーラム専務理事 **平野 喬**

「お彼岸になっても暑さが終わりません」「京都の紅葉はクリスマス頃が見頃でしょう」「沖縄のサンゴが大ピンチです。海の酸性化で10年後には美しいサンゴが見られなくなるかもしれません」「スーパー台風が上陸します。最大風速は70mです」

NHKのニュースウオッチ9の気象キャスター、井田寛子さん。優しい微笑みと柔らかな声で人気を博しています。内容はショッキングなことばかりです。実はこれ、「2050年の天気予報」として、国連の気候サミットで流されたNHK制作の映像です。

9月23日にニューヨークの国連本部で開かれた気候サミットには120か国以上の首脳らが集い、気候変動対策の進め方について話し合いました。それに先立ち、国連の世界気象機関と連携して世界の放送局がサミットに向けた特別キャンペーンとして制作したもので、今のまま何も手を打たないで温室効果ガスを出し続けていると、2050年の天気予報はこんなものになっているでしょうという、ブラックユーモアなどではなく、国立環境研究所の科学者も参加して作った科学的なシミュレーションなのです。

米国、中国が「削減」前向き発言

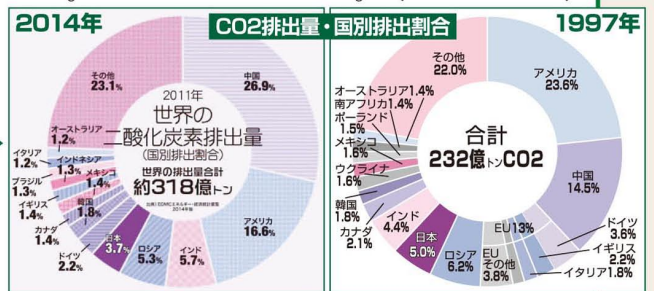
各国の放送局の訴えが心に響いたのかどうか分かりませんが、このサミットでは米国と中国の前向きな発言が注目を集めました。オバマ大統領は「米中は世界の

二大経済と二大排出国として、先頭に立つ特別な責任を持つ」と発言。中国の張高麗副首相は「温暖化対策を進めることはわれわれの内なる要求だ」と述べ、会場から拍手がわいたそうです。当たり前なことを言っただけ

じゃないかと思うかもしれませんが、この地球上で米中2か国が出すCO₂は40%以上にもなり、この2か国の対応が地球の温暖化を食い止められるかどうかのカギになっているのです。にもかかわらず、これまでの2か国の振る舞いは気候変動対策を進める上での「問題児」だったのです。

世界の国々が気候変動枠組み条約にもとづき、初めて拘束力のあるCO₂削減目標を定めたのは2005年に発効した京都議定書です。日本の京都でまとめた約束は、2008年から12年までに、1990年に比べてCO₂の排出量を先進国平均で5%削減するというもの。日本は6%、米国は7%の削減を義務付けられました。しかし、民主党から共和党に政権の変わった米国は、議定書の発効直後にこの約束をホゴにしまいました。

一方中国は、京都議定書が「共通だが差異のある責任」という考えのもと、発展途上国には削減義務を課さなかったために、経済最優先の政策をとり続け、あつという間にCO₂の最大の排出国にな



世界のCO₂の国別排出量は15年で激変しました。中国一国で世界の四分の一以上のCO₂を出しています(全国地球温暖化防止活動推進センター)

全く触れない安倍首相演説

そして、来年の3月までに各国が独自の削減案を国連に提出し、12月にパリで開かれる21回目の締約国会議で新しい削減目標を決めるスケジュールになっています。気候サミットには安倍首相も出席したのですが、ヨーロッパの国々が意欲的な削減案を示したのに、安倍首相の演説は全く削減案には触れませんでした。米中に負けない「攻めの環境政策」を来年はぜひ発揮してほしいものです。

つてしまいました。それでも中国は「地球の温暖化は先進国の責任」と主張し続けています。

こんな両大国が最近、地球の温暖化対策に前向きな姿勢を見せ、気候サミットで明快に「まじめにやります」と宣言したのですから、世界の注目を集めたのは当然だったのです。今世界は、京都議定書の次の約束を取り決めるためにハードな交渉が続けています。今度は京都議定書のような片肺飛行にならないよう、すべての国が参加するルールにしようとしています。

一般財団法人 地球・人間環境フォーラム
環境問題に取り組む公益法人。地球環境問題の科学的調査研究を目的に1990年に設立。
国立環境研究所・地球環境研究センターの研究サポート、研究成果の普及・啓発などのほか、月刊機関誌「グローバルネット」を発行。